

「自立的な言語使用者」を育てるための中級レベル教材とは？
—JF 日本語教育スタンダード準拠『まるごと 日本のことばと文化』中級の試み—

キーワード：CEFR、自立した言語使用者、課題遂行能力、ストラテジー能力、

【要旨】

Authenticity 近年、コースデザイン、授業デザイン、教材開発を行う上で、課題遂行能力や異文化理解能力の養成に焦点が当てられてきている。日本語教育の分野では、2010年に国際交流基金がCEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）に基づき「JF日本語教育スタンダード」（以下、JFS）を開発した。しかしこうした考え方を具体化した教材の開発は、日本語教育の分野ではまだ始まったばかりである。

本発表では、筆者らがかかわっている海外の成人学習者を主対象とした日本語教材開発において、JFS B1レベルの「課題遂行能力」をどのように解釈し、課題や素材を選んだか、また課題遂行に必要な「ストラテジー能力」をどう養成しようとしているかを、教材開発の実例とともに示す。具体的には、以下の通りである。

(1) Authenticity を考慮した課題や素材の選択：「自立した言語使用者」である B1 レベルの学習者は「日常的な場面でのさまざまな課題に対処できること」が求められる。本発表ではまず海外の成人学習者が日本語で直面する実際の課題やトピックについて、アンケート調査の結果をもとに述べる。次にこうした課題やトピックにもとづき、Authenticity を確保しながら、素材や活動、言語要素をどのように考えたかについて発表する。言語項目の選択を優先させた従来の教材では、情報差のある活動を取り入れるなど、言語行動については配慮したものが多いが、課題や素材そのものの Authenticity については、十分確保できていない場合もある。本発表では、そうした問題について、検討、工夫した点を実例とともに示す。

(2) ストラテジー能力の養成：B1 レベルは、現実の社会の中で、たどたどしいながらも、自分の言語のレパートリーを最大限に活用して、前述したような実際の課題を解決していかなければならない。そのためには、受容的な活動においても、産出的な活動においてもストラテジー能力の養成が必須である。本発表の中では、そのために「聴解」「やりとり」「読解」などの課題において、その能力の養成をどう教材上でタスク化し、実現をめざしたかを示す。